



Center for
Entrepreneurship

千葉大学アントレプレナーシップセンター

産業界と教育現場の連携を推進するコーディネーターに関する研究会 第2回：担い手とその訴求・育成

コーディネーター

共助を続ける仕組みにするためのCN文化

— CNの意義・担い手・コミュニティを現場から考える —

2026.2.20 fri

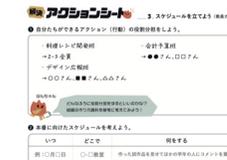
千葉大学アントレプレナーシップセンター 特任助教 小牧瞳

自己紹介/組織紹介①

- ◆ 小牧 瞳（こまき ひとみ） 栃木出身・30歳
- ◆ 千葉大学アントレプレナーシップセンター特任助教
2024年度以前には、千葉大学教育学部附属中学校にて非常勤講師（数学）、附属小学校にて特別支援員として従事、千葉大学教育学部特任助教として調査研究に従事
- ◆ アントレプレナーシップ教育・探究学習の授業デザインが専門。開発教材の提供や単元計画の支援。
- ◆ 自らコーディネーター（CN）として学校・自治体・企業のあいだで、期待値や前提を翻訳しながら調整

千葉大学アントレプレナーシップセンター 小中高アントレの取り組み

提供しているコンテンツ



教材提供

小中学生を対象としたアイデアの発想からアクションを起こすまでを考えるための教材「解決アクションシート」や起業経験者へのインタビュー動画を見ながら起業の要点を学べるストーリー教材「ネオスタの修行〜ドローン編/ゲームソフト編〜」等を教材はこちら HPにて無償公開しています。 <https://x.gd/cpytM>



探究学習の授業サポート・教員研修

地域と連携した探究学習やアントレプレナーシップ教育を初めて開始する小中高の先生の授業サポートや教員研修を行います。



ネットワーキングの機会

各種研修や年に一度開催予定の小中高大アントレ交流イベントにおいて、企業の方や行政の方、地域の方と学校の先生方が交流できる機会を提供します。





この
有らぬ!

◎ 1/4-スはどいつで
転てくる、どいつ
価値を見出すか
どいつか。

「(子)入」

自己紹介/組織紹介②

- ◆ 非営利型の一般社団法人Spiceを立ち上げ、民間の立場からも産官学連携の協働事業を実施

例：千葉県立佐倉南高等学校定時制夜間部×一般社団法人Spice×岩渕薬品株式会社×佐倉市役所による「健康まちづくり」プロジェクト

- ◆ 現場での実践と研究の両方の立場から、また学校現場と地域の両方の立場から、「共助をどう続く仕組みにするか」を考えている

PJ2年目の2024年6月に生徒が自治体職員へ提案する日の様子



詳細の活動レポートはクラファンサイトに掲載

今日の問い

コーディネーターが
学校と地域を「つなぐ」とは、
具体的にどういうことか？

アントレプレナーシップ教育とは？

アントレプレナーシップ教育とは、起業家を育てる教育ではなく、課題解決等を通して新しい価値を世の中に提供できる人材を育成するための教育

文部科学省

「アントレプレナーシップ」ってなに？

アントレプレナーシップとは、

様々な困難や変化に対し、与えられた環境のみならず

自ら枠を超えて行動を起こし、新たな価値を生み出していく精神です。

多くの仕事がAIやロボットに置き換わっていく社会において、

どのように生きるかを考え、実行する力を習得することがこれまで以上に必要になってきています。

アントレプレナーシップ教育は、自ら社会課題を見つけ、

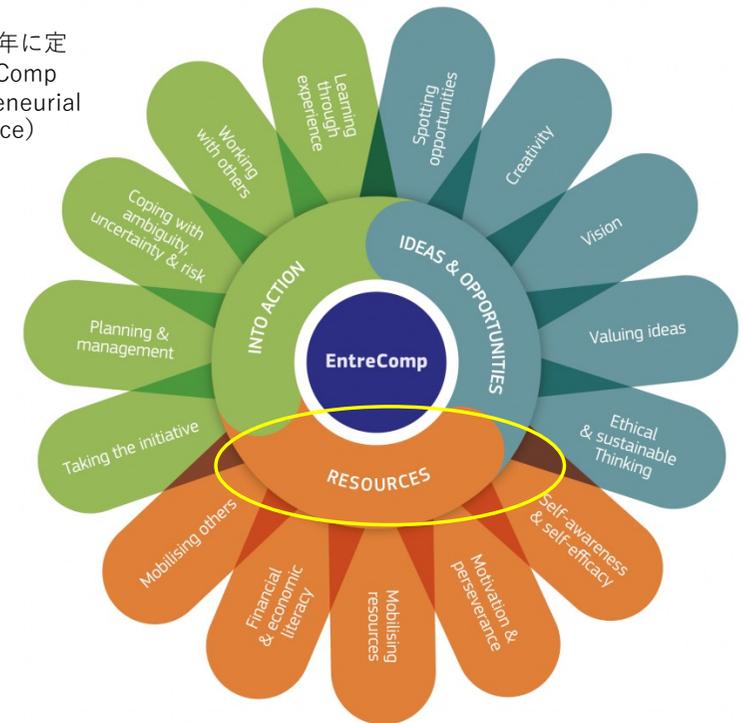
課題解決に向かってチャレンジしたり、他者との協働により解決策を探究したりすること

ができる知識・能力・態度を身に付ける教育であり、

起業家を育成するためのビジネス教育とは異なります。



EUが2016年に定めたEntreComp (Entrepreneurial Competence)



<https://entrepreneurship-education.mext.go.jp>

https://joint-research-centre.ec.europa.eu/entrecomp-entrepreneurship-competence-framework/competence-areas-and-learning-progress_en

コーディネートの語源

コーディネート (coordinate) は、co-「ともに」 ordi「整える」 -ate「する」から来ており、調整する (動詞) や座標 (名詞) の意味へと派生。

語源で紐解く「coordinate」の構造

単語を構成する3つの要素

co-「ともに」

共通、あるいは一緒にという意味を付加します。



ordi「整える」

順序 (order) の語源でもあり、正しく並べることを指します。



-ate「～する」

単語を動詞化し、動作や状態を表します。



coordinate
「ともに整える」という
コアの概念

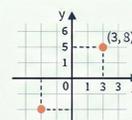
パーツが結合し、バラバラの要素を一つにまとめるイメージが形成されます。

v. 調整する (動詞)

複数の人や物事がうまく機能するように整えることを意味します。



n. 座標 (名詞)



数学的な位置を規則正しく整えて示す概念へと派生しました。

© NotebookLM

<https://gogengo.me/words/1609>

現場で起きている「連携」のリアルな課題

現場で起きている「連携のボトルネック」は、複数主体が関わることにより生じる「前提のずれ」

- ◆ 互いの当たり前が異なる（2～3日で返信があると思ったら1週間何の音沙汰がない OR 決裁を取るのに時間がかかるが、何度も連絡するのは申し訳ないので連絡しない。外部への連絡も管理職の許可が必要。）
- ◆ 同じ情報でも解釈が異なる（「ファシリをお願いしたい」→意見集約まで OR 進行のみ）
- ◆ 目的と方法のイメージが異なる（お客さんを意識した利益を黒字にするための社会的活動 OR 児童生徒の成長を意識したビジネスにおけるプロセスを学ぶための教育活動）
- ◆ 相手の真意を知らないことによる不安（地域貢献の一環で教育に関わりたい OR 商品PRの場として使われていると感じる）

CNの必要な理由（意義）

CNには、マッチングの機会創出だけでなく、PJ中に発生する複数主体間のズレの調整と期待値コントロールも求められる

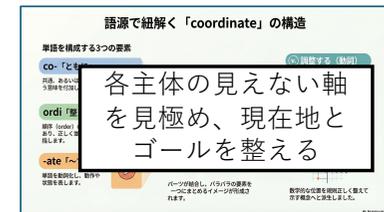
アントレプレナーシップ教育の場合

	普段意識している対象	日常的に行なっていること	慣れていないこと
教員	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒 管理職や同僚 保護者や地域住民 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の理解を前提とした語りかけ (A) 教育目標と連動した単元計画や授業づくり (B) 	<ul style="list-style-type: none"> 経済活動のプレイヤーとしての経験→ゴールから逆算した計画立案 (C) 外部予算の獲得、執行 組織外の人とのやりとり (D)
教員以外	民間企業 <ul style="list-style-type: none"> 株主や取引相手 管理職や社員 行政 <ul style="list-style-type: none"> 市民や地域企業、省庁 管理職や職員 	<ul style="list-style-type: none"> 経済活動のプレイヤーとしての経験→ゴールから逆算した計画立案 (C) 組織外の人とのやりとり (D) 	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の理解を前提とした語りかけ (A) 教育目標と連動した単元計画や授業づくり (B)

CNの必要な理由（意義）

CNには、マッチングの機会創出だけでなく、PJ中に発生する複数主体間のズレの調整と期待値コントロールも求められる

PJ前のCNによる声かけ例



◆ 「A社には若手社員の人材育成の観点で、学校には普段関わらない大人との出会いを見童生徒に提供できる点でメリットがありますね。」

→それまでの課題を振り返りながら連携のメリットを言語化する

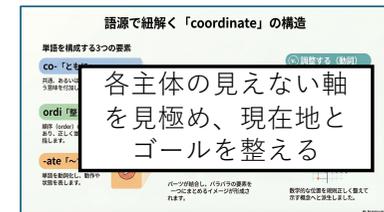
◆ 「マイルストーンを決めましょう。また、予算や集客の段取りも大筋確定しておきましょう。万が一、この日までに実施できなければ・・・」

→不確定要素を減らすために、どのような項目を押さえると良いのか示す

CNの必要な理由（意義）

CNには、マッチングの機会創出だけでなく、PJ中に発生する複数主体間のズレの調整と期待値コントロールも求められる

PJ中のCNによる声かけ例



◆ 「生徒の前で初めてゲスト講師に話してもらう場合、先生との対話形式の方がうまくメッセージが伝わるかもしれません」

→ 児童生徒にささらない長い話をするリスクを回避する

◆ 「このまま行くと当初予定していた〇〇の実現可能性が低いですね。元々の予算を超えてしまう場合、交渉の余地はあるでしょうか？」

→ 当事者同士だと後回し・タブーになりがちな話題をテーブルに乗せる

CNの難しさ

コーディネーターの必要性や意義について、自身で言語化・意味づけをしていく必要がある

- ◆ 連携する各主体のモチベーションや忙しさ、手続きの進めやすさをこちらではコントロールできない（学校の事務は学校外との連携を前提に設計されていない）
- ◆ 明確な仕事領域を設定しにくい
- ◆ 自身の活動に対する定量的な評価が難しい
- ◆ CNが個人単位での動きになりやすく、基本的に忙しいため、情報共有や課題を解消する場が少ない

誰がCNになれるのか？

「社会的処方」の考え方を援用して、誰もがコーディネーターになれる設計を提案。誰もが立場によらず教育に貢献できる文化を作ることが重要

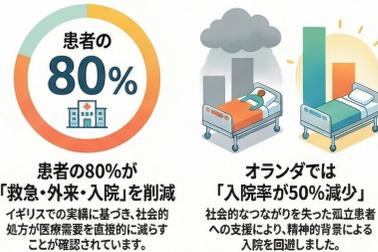
イギリスの医療分野で始まった「社会的処方 (social prescribing)」

医療を超えたケア：イギリス・オランダに学ぶ「社会的処方」の仕組みと効果

社会的処方の仕組み：医療と地域を「つなぐ」



圧倒的な導入効果：医療現場の負担軽減



© NotebookLM

医師は医療だけでなく地域への架け橋も！

医師が患者の薬の処方等医療的な処置を行うだけではなく高齢者が生活を取り戻していくための手助けとして地域でのボランティア活動や運動サークルの紹介等地域活動への参加を勧める

その仕事は医師だけでなく、市民も！

市民リンクワーカーにとって重要なことは「好奇心と思いやりを持って、目の前の個人を見ていく」姿勢である。

西智弘編 (2024) 『みんなの社会的処方 人のつながりで元気になれる地域を作る』学芸出版
内閣府「令和元年版高齢社会白書 (全体版)」https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/s1_3_topics4.html

誰がCNになれるのか？

「社会的処方」の考え方を援用して、誰もがコーディネーターになれる設計を考えるべき。誰もが立場によらず教育に貢献できる文化を作ることが重要

教師は学習の指導や生徒指導だけでなく地域への架け橋も！

教師が児童生徒の指導を行うだけでなく地域において一人の人間として生活していけるようにするための手助けとして地域の大人（行政や民間企業）の紹介等、地域活動への参加を教育活動に取り入れる。

同様の構図は教育委員会と管理職、管理職と学校教員の関係にも言える。

その仕事は教師だけでなく、市民も！

学校の内外をつなぐCNにとって重要なことは児童生徒の「好奇心と思いやりを持って、目の前の個人を見ていく」姿勢である。

さらに先生のニーズも共に具現化していく姿勢で。

さらに、CN自身も一人の主体として（当事者として）、すなわち知恵を出し合い、リソースを探し出し、事を共に（Co）進めていく仲間として関わっていくマインドや余裕も必要。

訴求の上で大事なこと

誰もがCNになれば、仕事としての価値が認められ、高い専門性を獲得する道筋も示すことで、社会貢献とインセンティブと自己の成長の見通しを

- ◆ 自分がどの畑の出身者か（公益（教育効果）と私益（企業のインセンティブ）等）自覚し、自分にはどのようなスキル（リソース）があるのか自覚する
- ◆ 「やりがい搾取」に陥らないよう、善意に頼らず仕事としての価値を世間が認められるように
- ◆ 自分が専門にやってこなかった領域のスキルを学び続ける（「学び続ける教師」のような「学び続けるCN」）

コミュニティ醸成に向けて

制度だけではなく文化をつくる。産官学それぞれ出身のCN・学校の教員や教育行政関係者・学校外の協力者が動きやすくするための施策をつくる。

- ◆ 学校外の人たちも児童生徒のために協力してくれる仲間であり、それが当たり前前の社会なんだという心理的安全性の確保。（学校現場は制度のもとで行われることが下りてくるとうんざりした気持ちになる。児童生徒の成長を願ってやりたいけども、忙しくてできない、自分の経験も不足している。じゃあやらない方がまだマシとなる。）
- ◆ 結局は「できる人」「やりたい人」が活躍するCNになっていくが、そうした「人」が生まれやすくなるためのコミュニティ設計として、多岐にわたる入り口を用意しておくのがいいのではないか。

まとめ

①異なる主体間の「前提のズレ」を見抜き、調整し、共に物事を進める

学校、企業、行政といった異なる主体が連携する際、それぞれの「当たり前（タイムスパン、意思決定プロセス、目的のイメージなど）」が異なるため、現場では様々な「ズレ」が生じる。何が語られているか、だけではなく、何が語られていないか、語られたことをどう解釈されているのかも含めて調整を行う。また、教育活動の最中や終わりまで、共に動く仲間（主体）として、モチベーションを持ってアクションを起こし続ける。

②「ねばらならない」仕事ではなく「楽しく、ためになる」仕事へ

特定の専門家だけがCNを行うのではなく、教員が上から押し付けられてやる仕事でもなく、誰もが立場によらず教育に貢献できる「文化」を作ることが重要。制度を作って終わりではなく、自身の成長を感じられ、コーディネーターの仕事自体が他者から認められ、自身の仕事によって他者がより良い方向へ近づいていると実感できるように、文化としてつくっていく。